

わたし ひろがれ！ みんな つながれ！

~いじめ・不登校の未然防止、不登校生等の学校復帰をめざして~

人間関係学科

H R S

プラス 集団づくりとの関わり

松原市立松原第七中学校

1. 取組の前提

子どもたちの課題

- ・自分に自信が無く、我慢することが苦手で「同調圧力」に弱い
- ・自分の気持ちや思いを伝えるのが苦手で、人への信頼が希薄な傾向がある
- ・経済的に厳しい家庭が多く、家庭での会話が少ない

子どもたちにつけたい力

- ・自己信頼 - 自分に自信を持ち、自分自身を好きになる
- ・自己管理 - 辛抱強く、集中して取り組むことができる
- ・ストレス対処 - 自分の感情をコントロールし、ストレスをためない

松原七中校区、3校(松原七中、恵我小、恵我南小)、1園(恵我幼)のめざす子ども像

- ・人の思いを受けとめ、自分の思いを表現できる子ども
- ・自分を見つめ、自分で考えようとする子ども
- ・人を信じ、人とながろうとする子ども

2. 研究開発学校(文部科学省指定)の取組

第一期研究開発(2003-2005) 松原七中

テーマ 不登校の予防・不登校生の学校復帰をめざす取組

- ~『人間関係学科』と『ほっとスペース』~
- ・(2003)人間関係学科創設
ストレスマネジメント WHOライフスキル
- ・(2004)自己肯定感
- ・(2005)人間関係学科の完全実施と社会的有用感

*『ほっとスペース』
家庭と学校との中間ステーション、松原七中内に設置

不登校生等支援
「ほっと」スペース
不登校生等支援会議
こころプロジェクト

第二期研究開発(2007-2009) 松原七中 恵我小 恵我南小

テーマ いじめ・不登校の未然防止、不登校生等の学校復帰をめざす取組』

中学校区でつながる11年間の人間関係づくりの学び

~『人間関係学科』と『ほっとスペース』~

- ・(2007)恵我小、恵我南小に人間関係学科創設
松原七中、ジェネリックスキル+市民性教育
- ・(2008)幼・小・中11年間の役割
ソーシャルスキルから人間関係創造力へ
ボランティア活動の推奨
ファシリテーション・リーダー育成

校区における不登校生等支援

校区としての一貫した
不登校生等への支援体制

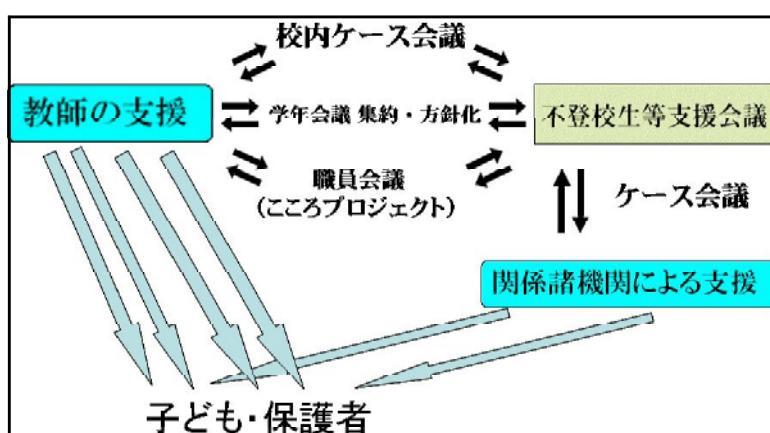
3. 松原七中、三年間の人間関係学科(Human Relation Studies 略称H R S)の流れ(パッケージ名)

| | 1年 | 2年 | 3年 |
|-----|---|--|--|
| 一学期 | 新しい自分に会う 新しい仲間との関係をつくる | 新しい自分に会う コミュニケーション法を学ぶ | 新しい自分に会う 修学旅行、仲間と分かち合う大切さを学ぶ |
| 二学期 | 仲間との関係について考える ストレスに気づき、ストレスをマネジメントする | 職場体験に必要なスキルを身につける 仲間との関係、自分のありかたを見つめ直す | 職業調査、社会に通用するスキルを身につける 進路決定、積極的な考え方を |
| 三学期 | 豊かな発想で問題解決 | クラスミーティング、ストレスに負けない方法を学ぶ 今までの自分の成長を確認する | 自分の成長を自覚し、仲間との関係をふりかえる |

4. 松原七中、人間関係学科(H R S)の特徴

- 1) いじめ・不登校未然防止の観点からの取組である
- 2) パッケージ方式で身につけさせたいスキルを明らかにし、授業一つひとつにターゲットスキルを設定している (WHOライフスキル ジェネリックスキル)
- 3) 三年間のカリキュラム(指導案・教具なども含む)をもっている
- 4) 総合的な学習や行事とリンクした内容になっている
- 5) 授業者としての指導目標、指導姿勢を明らかにしている
 - ・場づくり
 - ・ねらいの共有
 - ・子どもの気づき
 - ・ふりかえり、わかちあい
- 6) H R Sふりかえり用紙(授業毎)、学校生活調査(学期毎)のデータ蓄積を行い効果測定している

5. 不登校生等支援会議を中心とした支援



- ・不登校生等支援会議 (週 1 回)
- ・学年会議での論議 (週 2 回)
- ・校内での論議 (月 1 回)
- ・校内ケース会議 (適 宜)
- ・ケース会議 (関係諸機関へ要請)
- ・遅刻者への連絡体制 (副担任)
- ・朝の支援 (学年で)
- ・野外活動他 (適 宜)
- ・校区不登校生等支援担当者会議(月 1 回)
- ・校区不登校生等支援会議 (年 2 回)

- 1) 不登校生等への支援策を含めたコンセンサスを、担任のみではなく、学年・学校全体でつくる
継続的かつ複数の支援を支援チームとして
- 2) 子どもが安心できる場づくりと場の提供
- 3) 遅刻・欠席に関する情報管理と発信
- 4) 小学校と連携した取組(月 1 回の不登校生等支援担当者会議)
- 5) 小中一貫した支援体制の追求

6. 不登校生等の学校復帰の例

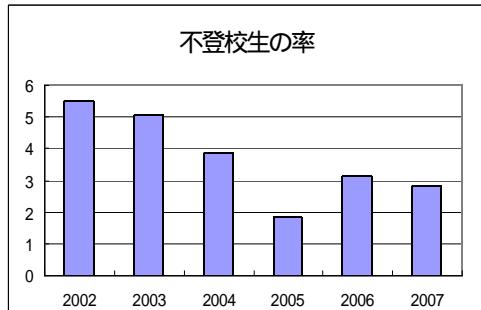
Aさんについて

不掲載

Bさんについて

不掲載

7. 不登校生の率の変化



徐々に不登校生の率が減少しているが、月30日以上の欠席の中でも、三年生になって復帰、復帰傾向にあるケースが多い。1年生後半から2年生にかけて、不登校に突入し、様々な支援の結果、3年生になって不登校ではあるが、出席日数は増加している子どもが多い。

8. 学校生活調査からみえる子どもの変化

1) 学校生活調査とは

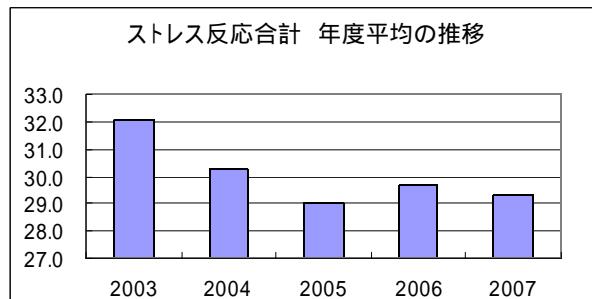
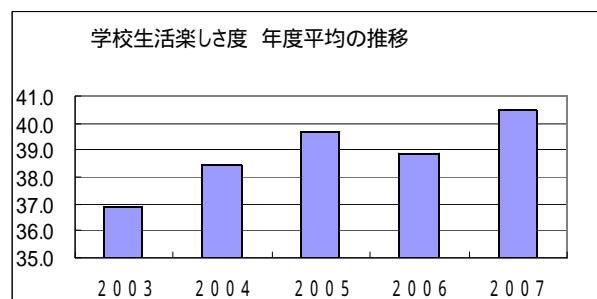
・各学期末に実施しているアンケート調査

・2003年度より実施、専門家からのアドバイスや参考資料をもとに作成

・以下の6項目で構成している

- | | | |
|----------|---------|-------------------|
| a.学校楽しさ度 | (全11項目) | 例 楽しく話せる友だちがいる |
| b.悩み | (全16項目) | 例 家がおもしろくない |
| c.ストレス反応 | (全15項目) | 例 物事に集中できない |
| d.コーピング | (全14項目) | 例 スポーツで発散する |
| e.ストレッサー | (全24項目) | 例 勉強、成績、進学や進路のこと |
| f.自己肯定感 | (全25項目) | 例 私はすぐ人のいいなりになります |

2) 学校楽しさ度とストレス反応



学校生活における楽しさ度に比例してストレス反応の減少が見られる。誰もが安心できる学校の要素は、学校生活における楽しさ度の増加や子どものストレスの軽減と関係が深い。

3) 子ども集団の質に関わって - 被侵害得点から見る

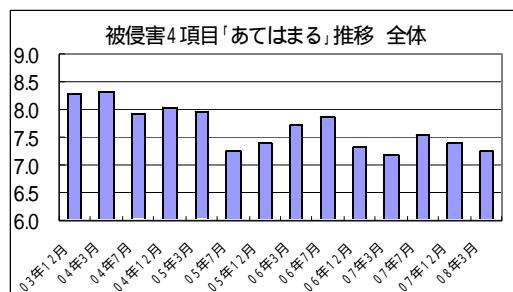
「b4 無視される」

「b5 いやなことを言われる(される)」

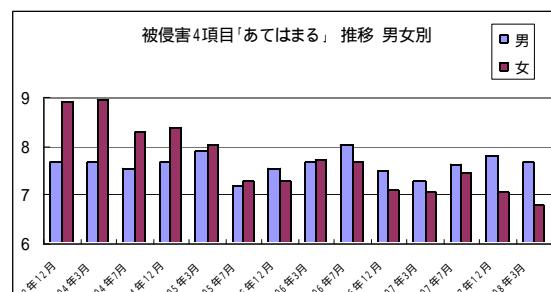
「b6 仲間はずれにされる」

「e7 人からの陰口や、うわさ話をされること」

学校生活調査の中から以上の項目の合計(21点満点)を、まわりから侵害されている度合いを測るという意味で「被侵害得点」として位置づけ、その推移を見た。

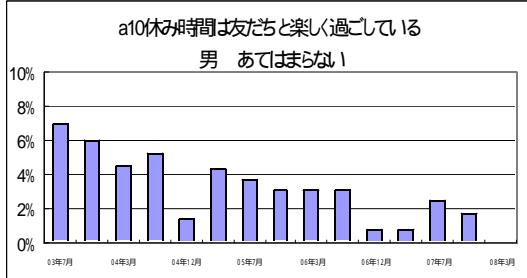


男女別では
→



女子の数値が減少し続けていることがわかる。女子において被侵害という観点で取組が効果的で

あったことが読み取れる。一方男子においては、「a10 休み時間は友だちと楽しくすごしている」の項目に「あてはまらない」と答えた子どもの変化である。大幅に減少し、2008年3月調査では0%という数字があらわれた。男子においては、遊びを通じてお互いの関係性をつくり続いていることがわかる。集団づくりの手法も、この男女の意識や現実のちがいの上に立ったものが必要であると思われる。男子においては、被侵害的要素。女子においては、遊び的要素。とは言うものの、男子における「幼さ」、女子における「抱え込み」という現代における特徴的なものがあらわれているのだろう。



9. 松原七中の集団づくりについて

1) 人権教育の4つの側面から見ると

(不登校生等支援 特別支援 日本語指導なども)

(総合的な学習・道徳の時間などで(キャリア教育含む))

↑
・人権としての教育 ・人権をつうじた教育 ・人権についての教育 ・人権のための教育



教師と子どもの間に、子どもと子どもの間に、人権を尊重した関係が構築されているか
この役割を人間関係学科(HRS)が果たしている(受容性・親和性という観点で)
基本的人権のうちの一つとして提唱されている「アサーション権」など

2) 集団づくりとリーダー育成の関係で

リーダー育成がなぜ必要なのか

- ・子ども像を集団像としてイメージしていくことで、どういう集団が望ましいかを規定する
- ・ジェネリックスキル12項目(自己信頼、自己管理力、コミュニケーション力、対人関係、境界設定、ピアプレッシャーへの対抗、決断と問題解決、ストレス対処、感情対処、時間管理、計画性、情報活用力)を身につけていくことで人間関係創造力を養う
- ・班活動(生活班)を人間関係創造力の実践の場として位置づける
- ・総合的な学習・道徳の時間とのリンク
- ・生徒会活動、ボランティア活動への推奨(自己肯定感 自己効力感 社会的有用感)



この中で力をつけてきた子どもがリーダーとして位置づく
順番的に考えれば、子ども集団の下支え リーダー登場、すなわち育成
・アサティブな生き方と人権意識に満ちあふれたリーダーの育成(ファシリテーション・リーダー)

3) 子どもを見る目や、生活を見る目を教師が身につけていくためには

- ・子どもへの惜しみなき支援
- ・保護者との人間関係づくり
- ・教師自身の学校での人間関係づくり
- ・地域の人たちとの交流・情報交換、教師も地域に関わる人間のひとりとして